

# 第11回「日本語大賞」

テーマ「美しい日本語」

高校生の部 優秀賞 受賞作品

「雨の顔」

イギリス

ダービーシャー日本人補習校

高等部2年 青木 宙

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「翠雨」。青葉に降りかかる雨のこと。雨の雫に草木の青葉が映つて、みどりに見えるのが由来だそう。先代の素晴らしい感性がひしひしと伝わってくるような表現である。冬の雨である「時雨」にも様々な種類があり、月明かりの中にちらつく雨は「月時雨」、山茶花さざんかの紅い花が咲く頃の雨は「山茶花時雨」というそう。春夏秋冬、四季折々の雨に異なる魅力を見出し、雨の強弱や降る時間帯でも細かく違いを表現する日本語の美しさ。同じ雨でも、その表情によって呼び名を変え、雨の足音の微妙な違いに耳を傾け、五感を研ぎ澄ますことによつて、雨というものの本質をより深く捉えようとする日本人の感性が、日本語の美しさを生み出している。その感性の豊かさを象徴するかにように、雨に関する表現は四百種類以上あるとも言われている。

例えば、激しく降る雨のことを、篠竹を束ねたものが降ってくる光景と似ているとし、「篠突く雨」と表現する。また、天気雨のことを「狐の嫁入り」と呼び、日が照っているのに小雨が降る現象を、狐火の怪しい揺らめきに例えた。もう既に存在している言葉をも、別の言葉で新たに言い換えるというこの粋な感性は、いつの時代にあつても新鮮で、その表現は私たちを飽きさせることがない。

日本人と雨との関係はとても深い。梅雨になると梅雨前線が日本を縦断し、秋が近づくと、台風が怒つたように雨を殴りつけてくる。時には人々に恵みをもたらさし、時には災いをもたらす雨。雨は日本人の生活の中にあつて、とても大きな存在である。

日本と同じく、雨が多いことで知られるイギリスではあるが、文化の違いからなのか、雨を表現する言葉は少ないように感じる。もちろん、英語にも小雨や土砂降りを表わす言葉はあるのだが、草花に滴る水滴や、しとしと降り続く雨を見ても、ありきたりの日常として自己完結してしまっているように見える。逆に晴れの日には、イギリス人のほとんどが日光浴をするなど、良い天気を存分に満喫する方に重きがあるようだ。イギリス人にとつて、雨の日は日常。だから、晴れの日をより一層大切にしているのだと思う。

それに対し、日本人は古くから清々しい晴れの日よりも、じとじとした雨に魅了されてきた。これは、幽玄を嗜み、わびさびを大切にする日本独特の感性ではなからうか。晴れの日よりも、不完全でどこか物悲しい雨に美を感じ、感性をくすぐられる日本人。そして、他の文化では敬遠されがちな雨を、日本人はその表情によつて呼び名を変えてきた。

日本語は擬音語の種類も豊富である。雨の強さを表現する時、「雨はぱらぱらと降り出し、午後にはざあざあ降りになった。」などと言う。擬音語は物事の様態を表すのに優れており、日本語特有の細かな表現を手助けしてくれる。英語にも擬音語は存在するが、日本語に比べて圧倒的に少ない。おそらく、日本人は動詞だけでは伝わらない物事の情景やニュアンスを細かに伝えるのが好きなのだろう。

その時々には様々な顔を見せる雨に風情を感じ、日本情緒漂う言葉をいくつも生み出し受け継いできた日本人。しかし、残念なことに現代になると、このような繊細な雨の表現の多くは、文学の世界でしか垣間見ることのできない存在と化してしまった。それらの言葉を実際に日常の中で活用する場面は、ほとんど無くなってしまったと言つていい。私たちは、「雨」の様々な顔を繊細に表現してきた日本語の素晴らしさを再認識し、後世に伝えていく義務があると思う。